



廣 瀬 川

第81号

平成24年
10月12日

仙台市小学校長会

発行者／野澤 令照（会長） 責任者／石野 勝美（広報部長）

主張

私たちは何を為すべきか ～仙台からの発信が意味するもの～

副会長 中舘 富也（北仙台小学校）



3月11日発災直後から直面した児童の安全確保と避難所運営。それは、多くの保護者や地域住民との連携という言葉を超えた共同体運営そのものだった。

情報の全くない中でのその運営は、相互の信頼関係なくしては為し得ない状況下であった。情報あるいは思いが、伝えたい相手にしっかり伝わって初めて、その価値が生まれるものと考えた時、そこには、送り手・受け取り手双方の信頼関係が不可欠であり、その関係性の構築を可能にしたか否かが、運営が滞りなく進むかどうかの決定的な要因でもあった。

私たちは発災直後、全国各地から多大な支援を頂戴した。人的な支援によってライフラインは復旧し、生活物資の支援によって飢えを凌ぎ、命を繋ぎとめることができた。

また、全国の校長先生方からの「息の長い支援を」という温かい言葉を頂戴しながらの教育活動の再開。

さらには、多大なる義援金・激励を、子どもたちの通常の学校生活再開に向けて大いに役立たせていただいたことは皆さん御承知のとおりである。

そして今、私たちは何を為すべきか。

復興元年の今だからこそ、校長としての熱き思いを形あるものとし、学校経営・学校改善に反映していくと同時に創造ある教育復興を成し遂げる時である。

仙台市小学校長会として連綿と息づく伝統に裏打

ちされた組織的活動をより着実に展開することによって教育諸条件の整備・充実等を果たし、防災教育・安全管理の構築に徹底して取り組むときである。

また、私たちは、手を差し伸べてくださった方々の思いに応えるためにも、「東日本大震災記録集」の作成に全力を傾ける。今年度末発行のこの記録集の持つ意味は大きく、まさに組織として宮城県小学校長会と合同で作成に取り組んでいることにある。

もう一つは、発刊にあたっての全ての経費が義援金によって賄われるということにある。更に特筆すべきは、編集方針として校長の判断や指示、その状況が時系列で取り上げられていることである。これは、必ずや今後の学校経営や新たな防災教育に資する記録集になると確信している。

この記録集を一人でも多くの方々に手にしてもらうことによって、支援してくださった全ての方々への深い感謝の思いと復興に向けての強い決意が、伝わっていくことを祈りたい。

震災直後からこれまでの期間、学校の置かれた状況や取組は、それぞれであった。しかし、全国の校長会の「連帯」は不変であり、今、私たちが為すべき最大のことは、全国の仲間からの思いや期待に応えるためにも、校長一人一人が危機管理の「熟達者」となって仙台から発信することである。

おもな内容

○主 張	1	○新任校長随想	6
○特集・復興	2	○編集後記	16

特集・復興

復興への新たな取組

「今」と「ここ」を大切にした教育活動を

袋原小学校 大江 広夫

1 あの日から

大震災を経験した子どもたちにとって、人との関りや命の大切さをこれほどまでに強く実感したことはなかったに違いない。

子どもも大人も、1日1日をかけがえのないものと考え大事に生きてきた。私たちも、いったい何ができるのか、何をすればいいのかを自らに問い続けながら今日まで歩んできている。

目の前の対応に追われながらも、学校がこれまで大切に続けてきたことを再確認し、今だからこそできることに真剣に向き合うことが最も求められているのではないかと考えるようになった。

2 道徳教育の充実を図る

(1) 生きることの意味や命を考える授業

本校では、指導内容の重点化や主題の系統的な配列に留意した指導計画の作成を行い、子どもの心に響く道徳の授業に力を入れている。「生命尊重」の価値項目を扱うに当たり、子どもたちのこれまでとは違う内面を丁寧に揺さぶりながら、互いの心の声を共有させる学び合いを取り入れ、よりよい生き方を考えさせていくことが大切であると考えた。

5年生は昨年6月の授業では「おばあちゃんからもらった命」という阪神大震災を取り上げた資料から、深い悲しみと絶望を乗り越え、新たな夢に向かって前に進もうとする心情について考えた。

9月の授業では、白血病にかかった男の子の生涯を終えるまでの実話を題材にした「命のあさがお」で、子どもたちに精一杯生きることについて考えさせた。

1月の授業では、「最後のコンサートーチェロ奏者・徳永兼一郎」を扱い、精一杯生きることのすばらしさや生命の輝きを感じ取り、自分にとって生きるとはどういうことかを考えさせた。

(2) 生活や学習に合わせた年間指導計画

本校では、道徳教育の全体計画を基に全教育活動との関連を明らかにした一覧表を作成している。この表には、全体の重点目標や学年の重点目標、月別重点価値項目がうたわれている。また、学校行事・特別活動・各教科・心のノートとの関連が明確に示されているので、指導者は年間の見通しを持ちながら、子どもたちの学校生活に合った重点的な指導を行うことができる。これらの具体的な方針や計画を受けて、各担任は学級における道徳指導計画を作成している。担任にとって、道徳教育を核にした学級づくりを行う最良のバイブルになっている。

(3) 保護者・地域へ発信している道徳だより

2か月に1度、道徳だより「Heartful Station」を発行している。各学年の道徳教育への取組や授業の様子、毎月の重点価値項目などについて、保護者や地域の方に広く知らせるようにしている。

今年の6月号では、2年生の「あなたって、こんなにすてきだよ」という題材を取り上げた。授業の感想で子どもたちが、「いつもやさしいと書いてもらったことがとてもうれしかった。」「こんなにいいところがあるということが分かって、自分でもびっくりしている。」などの意見を述べていたことを紹介している。

3 子どもたちに故郷をつくる

今私たちは、学校のアイデンティティを大事にした学習活動や体験活動に必死になって取り組んでいる。その中に、将来の復興を担う子どもたちがやがて出会うであろう様々な困難や課題を乗り越え、たくましく生き抜いていく力として働いていく何かがあり、きっとあるに違いないと考えている。

私たちには、忘れ得ぬ故郷をつくる教育を行う責任がある。未来の社会をつくり、支えていく子どもたちのためにも。

特集・復興

復興への新たな取組

荒浜小 2 年目の歩み

荒浜小学校 川村 孝男

1 はじめに

この間、多くの方々に支援を受け、何とか学校を再開した。しかし、課題もまだまだ多い。子どもたちの多くは、仮設住宅等に住んでおり、児童専用の部屋を確保するのは難しい。また、居住地域は多賀城市から南仙台と広範囲に散在している。登校手段は、ほとんどがスクールバスである。こうした現状を踏まえ、東宮城野地区 2 年目の平成24年度、4つの目標を掲げ歩むこととした。

2 4つの目標

- (1) 安心・安全・安定した学校運営を目指す。
- (2) 学力向上を目指し、子どもたちに力を付ける。
- (3) 健康（虫歯予防と体力向上）の維持と向上を図る。
- (4) 連携強化を行い、学習活動の充実を図る。

地域が崩壊した今、現状に即した総合等のカリキュラム作成が急務であったこと。規則正しい生活の確立を目指し、虫歯予防や体力不足への対応が求められたことを反映した目標である。その中でも、安心・安全・安定、連携の強化は、最も重要な目標であった。

3 非常時のスクールバスの運行

あるとき、保護者から災害時のバスの運行について問い合わせがあった。十数箇所に及ぶバス停で待つ子どもたちの非常時の安全確保は、緊急な課題の1つであった。そこで、同様にスクールバスを運行している中野小に声を掛け、学事課、バス会社と協議を重ね「津波の警報が発令されたとき」や「震度5弱以上の揺れを感じたとき」は、学校に戻るなど、登下校の状況に合わせた共通対応をすることとした。

4 「わが家のぼうさいカード」作り

バス運行の話合いの中、非常災害時にバス停にいる子どもたちをどのように安全確保するかが課題となった。子どもたちだけでバスを待つことが多いので、災害時には、こうした子どもたちが自分で判断し行動する指針が必要になった。そこで、「バス運

行に20分間の遅れが出たときは、何らかの事故があったと判断し、自宅に一旦帰る」というルールを決めた。子どもたちには、腕時計等の所持をお願いし、保護者には、急に帰宅したときにも入室できる方法や入れない場合の二次的な避難場所の設定するように呼び掛けた。それらの結果をまとめて記入できる「わが家のぼうさいカード」を配り、玄関等へ掲示するようお願いした。

5 学級ごとの防災教育構想図の作成

防災教育は、日常の教科指導等の中でも可能であるとの観点から、各担任にそれぞれの学級での防災教育構想図を作成させた。市の新たな防災教育を参考に全体の構想図を校長が作成し、各教科などにある防災教育に関連した必要な指導項目や単元名を記入させ意識化させた。これまで何気なく指導していた内容にも、防災につながるものがあることに気付くことができた。

6 連携による活動の充実

震災時91名いた児童数は、現在47名となった。昨年は、心のケアなどでの連携が主だったが、学習活動を充実させるためにも、連携強化は緊急の課題となった。間借りしている東宮城野小と会議を開き、今後連携することにより学習効果があがると予想される単元や行事について洗い出した。現在、多くの場面で日常的に合同学習等が進められている。学校行事では、修学旅行などに加えて、今年度は野外活動も同一日程とし、必要に応じて合同の活動を行うこととした。養護教諭を帯同しなければならない行事では、2校で交互に派遣するなどし、学校の事故にも対応できるように工夫した。2校同時の引き渡し訓練も行った。また、理科支援員の勤務を工夫することにより、週2回の支援が可能になるような学習条件を設定している。

7 終わりに

創立以来139年の荒浜小の歴史を受け止め、荒浜地区、東宮城野地区双方の地域性をどのように生かしていくか、今後の大きな課題となっている。

特集・復興

復興への新たな取組

新校舎とともに新たな歴史を刻んで

遠見塚小学校 岩槻 啓子

1 震災から新校舎へ

私が遠見塚小学校に赴任したのは、あの大地震から20日後のことでした。本校は、校舎建て替え工事のため、仮設校舎で教育活動を行っていました。天井が断熱材ごと垂れ下がっている教室が何カ所もあり、床にはまだ子どもたちのランドセル等が散乱したままで4月を迎えました。旧体育館の避難所「遠見塚村」は4月15日まで続けられました。21日に市内では最も遅い始業式・入学式を終え、やっとスタートを切ることができました。

しかし、建築途中の本校舎は土台だけで、工事は中断せざるを得ない状況でした。資材や人手もない現状では、平成24年度からの新校舎での活動は断念せざるを得ないと考えていました。ところが、6月から再開された工事は急ピッチで進み、平成24年4月4日には新校舎への引っ越しを迎えられることになりました。年度末・年度始めは工事や引っ越し準備でめまぐるしく過ぎましたが、震災後にもかかわらず新校舎での生活を迎えた子どもたちも職員も、明るい未来が感じられる出来事でした。

2 新校舎の生活が始まって

コンパクトながら、木の質感にあふれ明るい日差しが差し込む新校舎での生活は4月9日から始まりました。子どもたちは木の床の感触に触れ、廊下のベンチに腰を掛けおしゃべりを楽しみ、みんなが生活に「ゆとり」を感じるようになりました。仮設校舎であっても自分の学校で教育活動ができることをありがたいと思っていましたが、音が響かないことや明るいことが、こんなにも毎日の子どもたちの生活に大きな影響があることを改めて感じました。新校舎の完成を喜んだのは子どもと職員だけではなく、子どもたちを見守ってくださる地域の方々や本校を卒業していった中学生・高校生も、完成した校舎を訪れては、自分のことのように喜び満面の笑顔で学校を歩いて行かれます。学校が元気であることが地域の喜びであることを実感することができました。

3 「私たちの故郷」という思いの醸成へ

引っ越しは済んだものの、仮設校舎の解体・旧体育館の解体等、今後もしばらくは工事とは縁の切れ

ない本校ですが、今年度校舎改築の記念式典を行うことにしました。これを契機に「故郷としての遠見塚」を見つめ、そのよさを十分に生かした活動を展開していくことが学校と地域をつなぐ強い糸となり、さらにここで育つ子どもたちの確かな力にもつながると考えています。そのために、昨年3月の開校記念日に、旧校舎と新校舎の概要を子どもたちに映像で見せて、これからできる新校舎への思いを育てるきっかけを作りました。その後、次のような働きかけを行っています。

(1) 遠見塚の歴史を知ろう

まず、朝会で「遠見塚のいわれ」や「校章の意味」等話をしました。伊達政宗が地名に関わっていることや古墳の昔を知った子どもたちに「これまでのこと」に興味を持ってほしいと思っています。今後も開校当時の様子や桜並木等「学校のあゆみ」を知らせていく予定です。

(2) 児童主体の「復興プロジェクト」活動を

復興プロジェクト委員を6年生各クラスから選出し、その話合いの中からできることを実践していくことにしました。子どもたちの発案を生かして、4年ぶりにできた校庭での写真撮影や地域・近隣施設の方々へ花の種を送り、子どもたちの思いを伝える活動を企画しています。種を増やそうと植えた朝顔が、緑のカーテンとなって涼しげに咲き、夏の暑さを和ませています。

(3) 隣接する「遠見塚古墳」を生かして

史跡公園に隣接している学校の特色を生かした活動を展開しています。文化財課やボランティアの支援をいただきながら「古墳祭り」を10月に開催します。開会式に古墳人が登場するのを始めとして、火起こし体験や弓矢での的当て等、古墳にちなんだ活動と地域の方との交流も図ることができる活動を企画しています。また、PTAや関係機関の方々と連携を図り縄文式土器づくりと野焼きを行い、完成した土器は記念行事関係で展示する予定です。校舎改築とともに、一度断たれた伝統的な行事を復活させ、本校ならではの行事へとつなげていきたいと考えています。

特集・復興

復興への新たな取組

学校支援地域本部を活用した防災教育の推進

松陵西小学校 横山 美喜子

1 3年目の学校支援地域本部

本校では、平成22年度から学校支援地域本部をスタートさせ、昨年度も600名を超える学校支援ボランティアの方々に支えられて様々な活動に取り組んできた。その中では、学校に隣接する学習林の整備に年間を通して取り組んだり、クラブ活動の発展として地域の方を講師に招き、11の講座を3回にわたって実施したりするなど、特色ある活動が展開されている。



今年はそこに、加美町での農業体験が加わった。これは、5学年の社会科の発展的な学習に位置づけられているもので、田植え、稲刈りにはこちらから出かけ、収穫祭には加美町の方々や地域の方々をお招きすることになっている。先日実施された田植えの際は、加美町の方々、松陵の方々それぞれ10余名にご協力いただき、東小野田小学校の5年生と交流しながら田植えを行った。カントリーエレベーターの中も見学させていただくなど、とても有意義な活動となった。

2 加美町小野田地区との防災協定

平成22年、松陵地区では、加美町小野田地区と「災害救援活動相互支援協定」を締結した。これは、地域の公園で小野田地区の野菜を販売する朝市を実施するなど、長年の地域同士の深いつながりの中で培われてきた信頼の結果であった。

そしてあの震災が起こった。

3月12日、大震災の翌日、電気・ガス・水道のすべてが止まった松陵西小学校体育館の避難所に、防災協定に基づき、小野田地区の方々から、米・水・ガス（ボンベ）が届けられた。町内会を中心とした運営委員会では、それらを使って早速おにぎりを作

り、避難してきた方々に配ることができた。その後も小野田地区の方々は、行政からの給水のシステムが整う前に何度も給水を行ってくれた。



3 感謝と共助の心

昨年度の復興プロジェクトの中で、子どもたちから上がってきたのは、「助けてくれた方々にお礼をしたい。」という言葉だった。そこで、ライフラインの復旧や給水のために全国から来てくださった方々に全校児童でお礼の手紙を書いた。そこにはもちろん、小野田地区の方々にあてたものもあった。

そして、今年、学校支援地域本部の地域教育協議会長さんから、学校支援地域本部の活動として、地域からも援助するので、小学生の体験活動を加美町で行ってはどうかというお話があった。そこには、災害時の結びつきだけではなく、互いの理解や協力する活動を更に積み重ねていきたいという地域の方々の思いがあった。そして、それは、「共助の心」を培うための防災教育を推進する側として、学校にとってもありがたい申し出であった。どんな形での活動ができるかを考え、校内で話し合った結果、5年生の社会科で実施するという事になったのである。

4 これから

現在、本校は松陵小学校との統合に向け、両校の職員で来年度のカリキュラム作りの話し合いを重ねている。今年のこの活動をどのような形で継続していくかも大きなポイントになる。防災教育の視点をしっかりおさえ、地域の方々や小野田地区の方々と話し合いも進めながら、取り組んでいきたいと考えている。

新任校長随想 震災から学び、 復興に取り組む学校経営



これからも地域とともに

高橋 淳（岡田小学校）

大津波により甚大な被害を受けた地域の学校へ新任校長としての赴任ということで、大きな責任を感じてのスタートでしたが、保護者や地域の方々の心の温かさや復興に向けた力強さに触れ、決意を新たに組み組んでいるところです。

「地域とともに歩む学校づくり」が提唱されていますが、本校は昔から地域に支えられてきた学校であり、住民には同窓生もいて、岡田の人々にとって学校は地域の象徴であり、誇りでもあります。

仮設住宅で生活する高齢者の方々が、自らの生活も大変な中で、学校のために手縫いの雑巾を寄贈してくださいました。校庭の奉仕作業の際は、保護者や地域住民が草刈り機やトラックまで用意して、多数集まってきてくれました。

7月には、町内会と学校による「合同防災訓練」を実施しました。通常の避難訓練に加え、津波を想定した二次避難・保護者引き渡し・消火訓練・救命法訓練・炊き出し訓練など児童・保護者・地域住民・教職員が一体となり、充実した訓練を行うことができました。

防災訓練を含めこれからの防災教育は、学校・地域・家庭が課題意識を共有し、協働して行うことが重要であることを改めて強く感じさせられました。

被災地域の学校の校長として、子どもたちの大切な命を守ることをまず第一に考え、保護者や地域住民としっかりと手を結び、教職員の協働体制のもと、学校経営を推進していきたいと思っています。

震災から学んだ校長の姿

鶴谷 研（若林小学校）

大震災の発生時、旧宮城町の農村地帯の小学校に勤務していました。地域が互いに支え合い、震災時も近所の子どもを親に代わって面倒をみる学区でした。そのせいか避難所利用は一世帯だけでした。

昨年4月に赴任した学校では、一千人を超える避難民が学校に押し寄せていたそうです。混乱する状況の中で、地域住民が当日から食糧や燃料を持ち寄って炊き出しを行い、避難所運営も学校から地域へスムーズに移ったと聞きました。都市部であっても助け合いの精神が発揮されたことに驚きました。

学校経営においては、震災で連絡がとれず先が見通せない状況が続く、学校再開後も前例のないことについて校長の判断が次々と求められました。その時の決断はまさに学校の最高責任者としての資質が問われました。私は、幸いなことに昨年度一年間、校長先生のそばでその姿に学ぶことができました。

これらの大震災の経験から必要な時には、自ら決断ができる校長であることと地域に愛される学校をつくることが重要であると考えます。そのためには自らを磨き教職員の力を結束できる学校経営、地域の方に学校へ数多く足を運んでいただけるような学校運営を工夫したい思います。今は地域に顔を覚えていただいた程度ですが、知恵を絞り行動することで理解と協力をいただく覚悟です。

地域の一員として

菅原 一郎（生出小学校）

生出小学校では、3.11の大震災において、児童、保護者、教職員にけがもなく、学校施設にも大きな被害が見られませんでした。避難所も開設しませんでした。大きな被害を受けた沿岸部の地域と比較すると、児童の震災に対する受け止め方に大きな違いがあると感じました。

震災1年目の昨年度、石巻市立雄勝小学校との交流活動を行いました。甚大な被害を受けた雄勝小学校の児童と本校の児童が合同で「米作り」、「雄勝硯石の絵付け体験」、「雄勝の仮設住宅訪問」などの学習を進めてきました。また、本校の児童が雄勝町を実際に訪問し、自分の目で津波被害の現場を見てきたことは、児童にとって大きな衝撃ではありましたが、被災地への理解や思いやりの気持ちを育む絶好の機会となりました。この交流活動を通して児童は、改めて自分たちの地域を振り返り、見つめ直すことができました。

この活動を、防災教育を支える一つの側面ととらえ、今年度も引き続き交流活動を進めています。6月には第1回目の交流活動として、雄勝小学校の児童が来校し、合同で生出地区の水田で田植えをしました。

今年度は、学校の防災教育の見直しとともに、中学校および地域と一体となった防災組織を立ち上げ、地域全体での「防災町づくり」の一步を踏み出すことが大きな課題であると考えています。一人一人が地域の一員であることを自覚し、自分たちができることは何かをしっかりと考え、行動できる児童を育てていきたいと考えています。

地域と連携し、防災教育を充実させて

小熊 信治（福室小学校）

私は、震災当時、新設校富沢小学校の教頭でした。学校に被害はありませんでしたが、ライフラインが寸断されたことで、約1週間、避難所を開設するこ

とになりました。

開校2年目でしたが、学校が体育振興会の立ち上げに関わったことや、1年目から学校が主体となり地域と共催する新しい形の運動会を実施するなど、地域と一体となった学校づくりを進めてきたことが、震災時に大きな力になりました。避難所は町内会が主体となり整然と運営されました。

現任校でも、行事等を通して学区内の10町内会や民生委員連絡協議会等の地域団体と日頃から信頼関係を築くとともに、地域防災会議を新たに組織し災害に備えることにしました。

防災教育のさらなる充実にも努めました。現任校は、津波による被害はなかったものの仙台港近くに位置しており、平成23年度中に、校舎屋上への避難訓練などを既に行っていました。また、教育委員会の指示を受けて、防災マニュアルのさらなる見直しと整備を進めました。避難訓練においても、将来いっどこで地震に遭っても、自分の命をしっかりと守ることができるよう指導しています。

少しずつ復興は進んでいますが、まだまだ時間ばかりそうです。将来の復興を担うのは子どもたちです。たくましい心と体を持ち、復興という難題を解決できる柔軟な発想力を持った子どもたちを育てて行きたいと思います。

真の復興を目指して

菅原 幸二（折立小学校）

折立小学校は、団地の地滑りの影響で校地内立入禁止が現在も継続されています。この状況は、平成25年度末まで続く見通しです。

昨年の4月から11月までは間借り生活が続き、大変に不便な環境で学習活動を行ってきました。現在は、折立中学校敷地内のプレハブ校舎で学習できるようになり、学習環境は大きく改善されました。

しかしながら、今年の学力検査結果から、各学年ともにいろいろな課題が見つかりました。また、校地内に遊具がないことや校庭・体育館活用が十分でないことから、運動経験や運動量の不足も懸念され

ます。平成25年度末まで続くこの環境で、学力や体力の向上をどのように行うかが本校の真の復興に向けての大きな課題であると考えています。

学力向上に関しては、これまで少人数担当や教科担任が中心になり、放課後スクールや夏季休業中にサマースクールを開催しました。基本的には自由参加としましたが、双方とも参加児童で教室がいっぱいという状況でした。子どもたちの学ぶ意欲の大きさや保護者の期待が感じられます。

仙台市標準学力検査結果から見える課題に対して、学校が責任を持って行うことと、保護者に協力を願う内容を明確にし、連携して学力の向上を図っていきたいと考えています。

体力向上に関しては、中学校との施設借用の調整を密に行うとともに、近隣の公園の活用を積極的に行い、運動量の確保や運動内容の工夫を行ってきました。今後、移動式の遊具や備品等を整備・活用し、さらに体力の向上を目指します。

折立小学校の復興は、中学校との連携（意図的、計画的な児童生徒の交流、小・中教職員の連携）が必要です。ピンチをチャンスととらえ、教職員総力を挙げて取り組んでいきたいと思ひます。

震災を教訓として

柴 有司（鶴谷小学校）

平成23年3月11日の大震災から1年7か月が経過した。地震により失われたかけがえのない命を思うといまだに心が塞ぐ。自然の力の前に人間はいかに無力であるか。これまで当然と思っていた生活がいかに恵まれたものであったか。人と人との支え合いがいかに大切なものであるか。たくさんのことを一瞬にして考えさせられた出来事であった。

宮城県沖地震を想定した地震対策や津波に対する備えは学校にも行政にもあったはずである。しかし、想定を超えた規模の地震と津波に圧倒され対応は後手に回った。震災を人災にしないためには、「非常時には校長の判断・決断が子どもたちや職員の生死を分ける。」このことを肝に銘じておかなければ

ならないと痛感した。そのためには、「①正しい判断を下すための情報の収集を常に怠らないこと。②校長自らが地域を知り、地域の人々とつながりを持つこと。③学校防災マニュアルの修正・備品点検を怠らないこと。④防災主任を中心として有事の際に職員が共通行動をとれるように職員会議等で定期的に確認しておくこと。」を徹底しなければならない。

未曾有の大震災により私たちの防災意識は大きく変わった。学校は児童に対して安全に行動するための知識や技能を習得させるだけでなく「自らの命は自らで守るための行動が取れる力」を育成していかなければならない。「備えあれば憂いなし」、震災を体験した私たちに課せられた使命を自覚して、今後の学校経営に努めていきたい。

復興の担い手を育てる

佐藤 貢（大和小学校）

復興元年の今年、学校では、復興の担い手として子どもたちを育成しなければなりません。

本校では、震災を経験した児童が、実感をもって防災への意識を高め、実践力を身に付けていくことをねらいとして、「自分の命は自分で守るために考えて行動できる児童」の育成を柱に取組を続けてきました。具体的に言えば、児童一人一人に「自助・共助」の力を育てていくことです。教科・領域等の指導の内容と防災教育の関連性を明確にして指導すること、行事や児童会活動に復興に関する内容を取り入れ、児童の主体的な活動を促していくこと、家庭、地域を巻き込んだ計画的な防災教育、訓練を実施していくことです。

その他、地域、家庭との連携が大切です。単に防災マニュアルを共有するだけでなく、日常的な連携の中で、地域や保護者一人一人と顔の見える関係づくり、『絆』を強くすることです。これは、前任校で震災から学んだ強い教訓です。

今後とも、子どもたちの育成とともに、地域コミュニティの核としての学校づくりにまい進していきたいと思ひます。

学校は地域の中心だっちゃ

佐藤 智則（桜丘小学校）

目の前に広がる復旧・復興に向けた着実な歩みを続ける土地。瓦礫の山。横倒しになったままのビル。新任校長研修で、雄勝、志津川の今に立っていた。この光景から、児童の命の重さを感じた。自分の命は自分で守ること、命を大切にすること、助け合うこと感謝すること、を自校の教育の大切な柱の一つにすると誓った瞬間であった。職責の重さを感じた時であった。

私は、朝会やPTA総会等で、命の大切さや自助、共助について、児童ばかりでなく、教職員、保護者にも話すことを心掛け、意識の醸成を図っている。授業はじめ道徳教育、生徒指導、奉仕活動等すべての教育活動の中で、防災教育に取り組んでいく。

また、震災発生時の対応マニュアル等について、見直しを行った。引き渡し基準を明確にして保護者に周知し、訓練を実施した。保護者の意識が高まり、児童全員を短時間のうちに引き渡すことができた。さらに、学校以外で被災したときの家庭での約束等についても家庭で話し合うようお願いしている。

地域の皆様には、「学校は地域の中心だっちゃ」とおっしゃっていただき、いつも数多くの御支援、御協力をいただいている。私は、復興においても、学校と地域のつながりがとても大切であると痛感している。復興元年。感謝の気持ちを忘れず笑顔や元気を発信できる「安心・安全な桜丘小」を目指して、微力ながら努力している。

震災の体験を生かした学校経営を

狩野 一男（鶴谷東小学校）

東日本大震災では、当時の勤務校は日頃行ってきた避難訓練等が有効に機能し、幸いにも一人の犠牲者を出すこともなく全員が無事に避難することができた。しかし、いつ起こるかわからない災害に対して児童の安全確保をいかに図り、日頃からの備えとして何をなすべきかという観点で、それまで行ってきた防災教育を根本から見直す必要があることを実感させられるものであった。

当時勤務していた学校でも、学校施設が地域住民の避難場所となり、学校職員が中心となって避難所運営にあたることになった。初めての経験でもあり、様々なトラブルと困難が連日のように発生したが、当時の校長先生の的確な指示の下、なんとかスムーズに運営することができた。校長のリーダーシップがいかに大切であるか実感することができた。このことを教訓に、現在勤務する学校では、機会あるごとに地域や保護者への啓発を行いながら、仙台市の進める「自助」と「共助」の精神の大切さを理解し、地域防災のあり方について共通認識を持てるよう働きかけを行っていきたいと考えている。

さらに、今回の大震災は物的損害だけでなく、強い恐怖を感じたことによる心の傷を、どうケアしていくかということも課題となっている。特に、初めて体験した児童の恐怖心は、これから数年後にそのピークを迎えることが指摘されている。児童の心の変化に注意を払い、保護者との連携を図りながら心のケアを学校経営の柱の一つにして、教育活動を推進していきたい。



東日本大震災の教訓をもとに

大田口 賢悦（杵江小学校）

昨年度まで色麻町教委に勤務していて、大震災当日の午前中は色麻中学校の卒業式に参列していた。小・中一貫教育校の開校に向けた取組の一つとして、町内の小学6年生も式に参列していた。

式終了後、下級生は下校し、3年生は町公民館を会場に親子で「卒業を祝う会」に参加していた。小学6年生は式の感動を学校に持ち帰り授業を受けていた。

しかし、忘れもしない午後2時46分、これまで経験したことのない強い揺れが長い間続いた。揺れが収束して間もなく、町長を本部長とする災害対策本部の立ち上げと、住民の安否及び被害状況の確認が開始され、町教委の職員は学校関係を中心にその作業にあたった。

幸いにも色麻町には、ほとんどの世帯が加入する有線放送があり、電話としての機能は、勿論のこと、各所からの一斉連絡が可能のため、この日も役場からの確認や指示、給水の連絡をはじめ、児童引き渡しの連絡等にもその効果を発揮した。

一方杵江小では、その日の午後5時頃、体育館を避難所として、約600名を収容したとある。11日間の開設で済み、校舎も被害が甚大な学校に比べれば、軽微であったと言っても過言ではないだろう。

それだけに、非常変災時の対応マニュアルの整備や訓練、そして保護者との連絡や児童引き渡し、さらには、学校が避難所となった場合の対応など、日頃から意識を高くし、家庭や地域との連携を大切に、万全の態勢であたりたいと考えている。

地域と共に、一步一步

佐藤 澄江（東四郎丸小学校）

燕沢小学校に勤務していた折に東日本大震災に遭遇しました。学校、区役所からの支援員、町内会長、地区社会福祉協議会長、婦人部長等からなる防災対

策本部で1日1回会議を開き、地域支援について話し合いました。そこで、学校が地域の中で大切な役割を担っていること、また、地域の方々に支えられていることを痛感しました。

東四郎丸小学校は、名取市閑上に隣接し、すぐ近くに名取川が流れています。そこで、今年度、地域の町内会会長、婦人部長、連合町内会会長、体育振興会会長、消防団、PTA会長、民生委員、学校支援スーパーバイザー等で、学校に児童がいるとき、いないとき等の支援体制について話し合っています。この後、中学校区でそれぞれの連携について考えていく予定になっています。

今年度から、防災教育が教育課程の中に位置付けられました。この防災教育を通して、子どもたちが、自助、共助の精神を学んで、命を守り、豊かな人間に育っていくことができるように、今、地域の方や大学などの協力を得ながら、学校で何をすべきか検討し、一步一步歩みだしたところです。

大変な災害に見舞われましたが、この震災を通して地域とのつながりが深くなりました。この経験から学んだことを風化させることなく、地域や保護者の皆様や関係諸団体の御支援・御協力をいただきながら、学校として取り組まなければならないことを一つ一つ実行していきたいと思っています。

震災での絆を原動力にして

山田 洋一（沖野東小学校）

千年に一度といわれる大震災に遭遇し未曾有の被害を受けたが、その一方で、学校・地域が一丸となって避難所開設や運営等の復興に取り組む中で、人とのつながり、地域との連携、学校への信頼等が深まった。この震災での絆を原動力にして、沖野中学校区の懸案であった地域総ぐるみで子どもの成長を支援していこうという中学校区学びの連携事業が、平成23年度よりスタートした。

連携事業の柱は、小・中連携教育である。校種の枠を越えて学力や地域の教育力向上を図り、未来に自立したくましく生きる子どもたちの育成に取り組

んでいる。平成24年度より中学校区3校が共通の教育目標を掲げ自分づくり教育、学力向上、学校生活向上、特別支援教育の4プロジェクトを協働型重点目標に位置付け、学校運営を推進している。

また、地域連携にも力を注いでいる。中学校区災害対策委員会を立ち上げ、地域・家庭・学校が総合防災訓練を実施している。当日は町内会毎に個人・地域訓練を実施し、距離の近い学校に避難している。各学校では、避難所開設訓練、仮設テントや救助トイレ組立、AED取扱い、ハンディキャップ体験等の防災訓練を行っている。町内会が中心となり、より実地的な避難訓練や防災訓練を目指している。

「震災での絆を原動力にして」を復興の合い言葉に学校・地域・家庭が連携をより一層堅固なものにし、沖野学園教育目標「自ら拓く自分の未来」の達成を目指していく所存である。

考えるだけでは進まない…

安倍 啓司（田子小学校）

田子小学校の校長室は、校庭に面した2階にあります。休み時間は子どもたちの歓声が聞こえ、広い校庭を走り回る元気な姿を見られるのが何よりうれしく、励まされる毎日です。震災時、本校は津波の被害はありませんでしたが、被災地からの転入者や職を失うなどして就学援助を受ける家庭が増えました。

そうした影響もあり、生活に追われ子育てまで目が行き届かない家庭があります。あまり家庭で褒めてもらえない子もいます。何事にも投げやりな子もいます。「学校は楽しい！」との思いを持たせられたら…と願い、校長として自分に何ができるか、何をしなければならないか、自問する日々です。

①日常的な地域連携の絆を太くしたいと思います。また子どもたちを見守ってくれる目、褒めてくれる目を増やしたいと思います。保護者や地域住民による学校支援ボランティアを活用した学校経営を考えています。②どんな困難な状況の中でも、決して諦めず、今自分にできることでみんなの役に立と

うとする子どもを育てたいと思います。学級の話合い活動や係活動を大切に、自己有用感を高める活動をより多く経験させたいと考えています。③被災された方々等が入る公営住宅が学区内に建設される予定です。被災児童の転入を視野に入れながら、心のケアを含めた、学級担任の学級経営力を高めていきたいと考えています。

そのためにも教職員の同僚性を高め「チーム田子」を作ることが校長の仕事だと自分に言い聞かせて頑張っています。

児童に寄り添った復興への取組

深堀 道哉（貝森小学校）

東日本大震災においては、多くの児童が深刻な被害を受け、また、深い心の傷を負っている。児童にとって、一日も早く震災から受けた恐怖心をぬぐい、各自が受けた心の傷を癒していくとともに、震災に遭われた方々を思いやる心を持ち続けることが大切である。また、その一方で、児童の心のケアを継続して行うとともに、この震災体験をその後の防災意識や児童・学校・地域の防災能力の向上に結びつけていく教育を行うことが公教育の使命であると考えます。

この使命を果たすために、校長として、以下の事に取り組むたい。児童の連帯感や主体性を尊重した教育活動を展開していきたい。震災を受け止め、それを自分たちの力で、そして互いに協力し合って、つらい体験を乗り越えていこうとする生きる力に変えさせる活動を実現したい。

そのため、1点目は、児童の発想や企画力をできるだけ尊重した児童会活動の実施である。2点目は、訓練形態や人材活用の面で、より地域と密接に結びついた防災教育を実施することである。3点目は、エネルギー教育やキャリア教育の側面を持たせた自分づくり教育の実施である。

この震災から自分たちが何を、そして何をなすべきなのかを児童一人一人に考えさせたい。この体験から得た教訓を生かし、被災地の復興とともに、

希望を持ち未来に向かって前進していくことができるような復興教育を実現していきたい。

笑顔・笑顔！ まずは教職員が元気であること！

小林 好美（作並小学校）

「先生方が楽しくなくては、良い教育はできません。まずは、先生方が元気で笑顔を忘れずに、チーム作並を合い言葉に取り組んでいきましょう。」

着任して、最初の職員会議で発した言葉です。小規模校のため、学校運営上教職員一人一人の果たす役割は大きく責任も重くなります。だからこそ一人で悩まず、どんなささいなことでも言い合える雰囲気作り・環境作りが大切だと思います。

震災の影響により、南相馬から転入した3名の児童がいます。転入当初は震災のことを思い出しては精神的に不安定になり、心配した児童もいたようですが今はクラスのリーダー的存在になり、はつらつと活動している姿に子どもたちの底力やたくましさを感じます。まだまだ表面に出ていない部分で、心のケアが必要なこともあります。安心して学校生活を送ることができるように、まずは教職員の笑顔と児童との温かい心の触れ合いを大事にしていきたいと思います。小規模校の強みと弱みをしっかり理解しながら、強みである①教師の目も手も行き届き、個別指導を実施しやすいこと②施設の利用が十分確保できること③児童と教師の触れ合いが多くなること等を最大限に生かし、学校経営方針「少人数学級のよさを生かし児童一人一人に寄り添いながら、明るく楽しい信頼される学校」を目指し、保護者・地域と協力しながら教育活動を推進していきたいと思います。

笑顔！笑顔！まずは教職員が元気であること！

すべては子どもの命を守るために

大泉 淳一（大沢小学校）

震災当時は、児童の引き渡し、下校した児童の安

否確認そして避難してきた方々への対応と、すべてが一度に起こり無我夢中で動いていました。

今回の震災で、学校は避難所開設の場面などで地域の方から大変感謝されました。一方、教職員や子どもたちは地域の方々からの励ましで授業の再開を目指すことができました。

このような経験を基に、私は次の2点に重点を置いて今後の学校経営にあたりたいと考えています。

①生きぬく力の育成

今回は、平日の日中に起こった震災でした。しかし、自然災害はいつ、どこで起こるか予測できません。したがって、児童自身が判断して避難行動をとることができるようにする防災教育が必要になってきます。これは全ての災害から身を守る教育につながり、やがては大人になってからの自他の命を守る力にもなります。

②地域防災組織とのさらなる連携

学校は、地域あつての学校です。地域の方々の持っている力も借りながら、子どもたちの命を守ることに力を注ぎたいと考えます。そのためには地域でできることと学校でできること、そして共同で行わなければならないことなどをしっかり話し合い、役割分担を確かめ合いながら非常時に備えたいと考えております。

子どもの命を守ることが学校の使命であるということを変更して知らされた今回の震災でした。

子どもたちの前向きな姿を見せることで

三井 裕（大倉小学校）

旭丘小での3週間にわたる避難所運営。そこで実感したのは、学校と地域の日頃からの結び付きがいかに大切かということ。当初は多少混乱したものの、程なく役割分担を決め、助け合って運営を進めていった。これは、町内会・老人クラブを母体とした「守り隊」や「学校支援地域本部事業」の関わりで、学校と地域が日常的につながっていたからこそと思う。

3月24日に延期した卒業式は、体育館が避難所の

ため多目的室で挙行。臨席された地域の方々の感極まり涙を流している様子が今も目に浮かぶ。卒業児童の前向きに巣立つ姿が、震災対応に疲弊した心と体に元気を取り戻す栄養剤となったようだった。

大倉小に赴任し、地域の方々に守られ愛されている学校であることを、様々な活動や行事を通してつくづく感じる。震災直後は、学校の方が逆に地域の人々から励ましや支援をいただいたとのこと。

受け継がれてきた地域との結び付きを大切にするとともに、大倉の豊かな自然環境を生かした活動や伝統文化を継承・発展させることが本校らしい復興への取組と考える。

8月4日の定義祭りでは、全校児童が毎朝続けた定義太鼓の練習の成果を披露。子どもたちの誇りに満ちた演奏が、地域の方々はもとより、当地を訪れた人々に、前に進む元気を与えられたと思う。

今後も、地域の環境や文化を取り入れた活動に誇りを持って前向きに取り組む子どもたちの姿を見せることで、復興への取組を地道に進めていきたい。

おばあさんから教えられたこと

坂本 憲昭（七北田小学校）

七北田小学校には、頻繁に花壇の草むしりや通学路の清掃などをしてくださるおばあさんがいます。

このおばあさんは、学校の近くに一人で住んでおり、震災前は学校に来ることなどなかったそうです。

しかし、家が被災し、しばらく体育館で避難生活を送った際、本校職員の献身的な対応を受けたことで、震災への恐怖心が徐々に薄らぎ、心の安定を取り戻したそうです。このことがきっかけとなり、自分を助けてくれた七北田小学校に感謝の気持ちを表したいという思いが高まり、草むしりなどをするようになったのです。

学校においでになった際、「自分を助けてくれた学校に恩返しをしたい。」という思いを繰り返し話す姿から、このおばあさんは学校（子ども）のために何かをすることが生きがいになっているのだと感じま

した。

震災は悲しく、つらい出来事ではありますが、震災を通して私たちは「人とのつながり」や「共助の心」の必要性を改めて認識することができました。これからの七北田小学校を「地域の方々のより所」「人と人がつながり合う場」にしていくことが、このおばあさんの行為に応えることになるとともに、家庭・地域と連携した、より豊かな教育環境の創出につながっていくものと考えています。

子どもたちの未来のために

中村 昌人（野村小学校）

多くの感動をもたらしたロンドン五輪大会が閉幕した。お家芸である柔道は、歴史的惨敗という結果に終わったが、この柔道の指導理念の一つに、「自他共栄」というものがある。相手に対し、敬い、感謝をすることで信頼し合い、助け合う心を育み、自分だけでなく他人と共に栄えある世の中にしようとすることを意味している。また、終戦直後の荒廃した社会の中で創設された少林寺拳法においても、「半ばは自己の幸せを、半ばは他人の幸せを」と自己確立、自他共栄を説く理念が見られる。

復興元年として、これまで以上に「人づくり」を基本と捉えて、学校経営を進めていきたいと考える。しかし、復興教育に係る基本姿勢としては、新たに何かを起こすのではなく、これまでの教育内容を見直し、再構築していくのが最善と考える。特に、道徳教育を始め、自分づくり教育、防災教育のほか、体験的な活動、勤労生産・奉仕活動、心のケアを含めた健康教育の在り方などがあげられる。

本校の教育目標は、「生きる力を身に付け、夢に向かって頑張る児童の育成～進んで学ぶ子、助け合う子、頑張りぬく子～」である。自らを高める努力を重ねつつ、人との関わりを大切にしながら、感謝と謙虚さ、思いやりの心を忘れず、正しい判断のもと、勇気を持って行動できる児童であってほしいと願う。これからも研さんを重ね、子どもたちの未来のために誠心誠意努めていきたいと思う。

校木「けやき」とともに

丹野 富雄（南光台小）

4月から勤務している南光台小学校は、甚大な被害を受けた被災校である。子どもたちは2011年11月まで近隣の中学校や市民センターなど4か所に分散して学習活動を行ってきた。今年度から校舎復旧の新築工事が始まる。基本計画作成にあたり、校舎正面にある校木『けやき』を撤去するか否かの意見をPTAから聴取した。圧倒的に存続を望む声が大きかった。「校舎が解体され更地になるだけでも悲しい気持ちになる。更地の真ん中に凜として立つ校木『けやき』を毎日見上げることで勇気と希望がわいてくと思う。」至極もっともな御意見である。校木『けやき』は、南光台小学校に学んだ方々、学んでいる子どもたち、これから学ぼうとしている子どもたち、地域の皆さんのより所なのである。

南光台地区の方々の地域に対する愛着には極めて熱いものがある。毎朝そして下校時には、町内の各所にボランティアの皆さんが立ち、子どもたちの登下校を見守っていただいている。南光台小学校は、地域の熱い思いを資源として大いに取り入れ、学校と保護者、地域住民が共に手を携えて子どもたちの教育活動を積極的に推し進めている学校である。

南光台小学校の震災からの復興はこれから始まるといっても過言ではない。子どもたちは、仮設校舎という十分とはいえない教育環境の中で、けなげにも一生懸命に学習に励み、思いきり遊んでいる。2年後に完成するであろう新校舎に思いをはせながら。

普通の学校生活を取り戻すことから!

丹治 重廣（将監小学校）

4月、赴任直後の校医さんへの挨拶回りに行く車の中で、養護教諭からこんな話を聞いた。「22年度に比べ、23年度の欠席者数が、200人以上少なかったんです。11月まで、将監中央小に間借りしていて通

学距離も長かったのに…。子どもたちなりに、頑張らなくては、と思っていたのかもしれませんが。」私はこの話を聞き、胸が熱くなった。現在本校は、仮設校舎とそのため狭くなった校庭の生活が続いているが、11月末には改修工事が終わり、その後本校舎に戻る予定である。年度初め子どもたちに示した目標は、「みんなで、知恵と力を合わせ本校舎に戻ろう!」であった。それは、めどがついた今も変わらず、夏休み明け朝会でも、「子どもも大人も『チーム将監』として力を合わせていこう!」と宣言した。

冷暖房完備、洋式トイレも多く清潔感あふれるトイレや水回りの仮設校舎生活も快適な面もあるが、やはり仮の生活である。今後も、子どもたちにとって「普通の生活」を少しでも早く取り戻し「普通のことで頑張れる」環境を再度保障することが、私たちの責務であり、それに向け頑張っていきたい。また、本校舎へ戻る際には、子どもたちにも作業に関わらせ、戻ったことを実感させることで心理的なソフトランディングを図りたい。さらに、今年度開始予定の学校支援地域本部事業を取り入れ、学校と地域の絆を強め、地域の力を生かし、より良い環境の下、子どもたちを育てていく決意である。そして震災に負けない「地域とともに歩む学校」づくりに、日々励んでいこうと、今、強く思っている。

支え合う力

安田 まき子（高森小学校）

震度6強というこれまで経験したことのない長く長い揺れの後、必死に避難してきた子どもたちは、恐怖のあまり声を出すこともできませんでした。雪の寒さと幾度となく続く余震の恐怖に震える中、一人また一人と泣き始めると隣の子どもが背中をさすってあげながら「大丈夫だよ。」と声をかけてあげる姿が見られました。自分も泣きたいのに必死にがまんをし、友達を励ましているそのけなげな姿を見たときに、いとおしさが込み上げてきました。この非常時の中でも友達を思い優しく支え合える力を子どもは持っていると感じたと同時に、「この子ども

もたちの命を守らなければ」という強い使命感とその重責を感じた瞬間でした。

その後の避難所は、初めから地域住民の手による自主運営となりました。地域住民の持つ底力には圧倒されるばかりでした。10年以上続いた学校と地域が合同で行う総合防災訓練の成果が見事に発揮されたのです。

この震災で気付かされたことは、「子どもが秘めている支え合う力の強さと地域住民が結集して支え合う力の強さ」です。震災からの復興を成し遂げるには、この「人と人が支え合うこと」を忘れずにより絆を深めていくことが大事なことだと思います。

この「支え合う力」は震災を経験した子どもたちだからこそ、これからの未来を生き抜く力になっていくものだと思います。学校だけでは高められないその力を家庭や地域とともに育んで参ります。

震災から学び、復興に取り組む学校経営

菱沼 伸一（泉ヶ丘小学校）

昨年3月11日、石巻市の前任校で大震災に遭遇した。前任校は、校舎1階の浸水被害は回復したものの、体育館とプールはいまだに使用できない状態である。不幸中の幸いは、全校児童及び保護者が全員無事だったことであった。

この大震災は多くの教訓を与えてくれた。この教訓を今後の学校経営の中でいかに生かしていくかが大きな課題と言える。

第一の課題は、日頃からの危機意識をいかに高め、継続し、準備しておくかである。今回の大震災では「想定外」という言葉がたびたび使われてきたが、どのような場合にも対応できるだけの危機管理マニュアルを含めた準備が必要であると思う。また、学校だけでなく、地域あるいは関係機関との日頃からの連携の在り方が今後さらに求められると考える。

第二に、具体的な避難の仕方である。今回の大震災でも、電気関係などがすぐに停止し、避難連絡等のための機器は全て使えない状況となった。このような場合を想定し、担任の指示での避難、あるいは

担任がいない場合での避難等について日頃から徹底しておく必要があると思う。特に、登下校時の災害対応には、時間をかけて徹底していく必要があると考える。

第三に、避難所等としての学校の在り方である。校内での共通理解は言うまでもなく、避難してくる地域住民に対して、日常的な連携を十分にしておく必要があると考える。

地域にとけこむ

菊地 和則（長命ヶ丘小学校）

震災翌日から避難所が学区内の各町内会の集会所に移ったものの、役所と避難所をつなぐ役割のため、ライフラインの復旧しない学校に、教頭の私は校長先生とともに寝泊まりしていた。先の見通しも立たず、その日を過ごすことで精一杯だったとき、毎日、炊き出しの温かいおにぎりを職員室に届けてくださったのは、連合町内会長もされている学区の町内会長さんだった。今でもあのおにぎりの温かさ、ありがたみが忘れられない。その関係は、学校と地域で共催する運動会の準備や様々な場面で、日々、地域の方々と顔を合わせていたからに他ならなかった。たった一日だけの避難所ではあったが、避難してきた人々は、町内会での指示を守り、寝具や簡単な食料を持参していた。こうした地域に勤務でき感謝するばかりだが、ありがたいことに、校長として赴任した勤務校でも、地域が常に結束して機能しており、学校を支えてくださっている。

すばらしい地域の子どもたちをお預かりする責任の重さを感じながら、将来、目の前の子どもたちがこの地域を支える人材となっていることを夢見て、職員のやる気を引き出すための方策を思案する毎日である。

学校という組織のチームづくりも、保護者・地域との関係づくりも、根っこにあるのは、温かい「情」であると感じている。子育ても同じであろう。それをキーワードに、地域に溶け込み、心でつながる教育を行っていきたい。

これからの防災教育に求められること

志村 睦雄（西山小学校）

東日本大震災で津波の被害を最小限に抑えた釜石市の防災教育を指導してきた大学教授は、「大いなる自然の営みに対する畏敬の念を持ち、自らの命を守ることに主体的になれ」と防災教育の理念を述べている。

防災教育で一番大切なことは、敵は災害ではなく、「己」という認識である。逃げようとしないう、また想定を上限値ととらえてしまう人間の一般的な心構えが、災害への備えで障害になってしまう。

これからは、子どもたちに、まず己を知り、自然災害に対して正しく認識させることが重要である。特に重要なことは、相手は自然だから、どんなことでも起こり得るということである。防災教育は、単に災いをやり過ごす知恵を与えるだけでなく、地域の一員としての役割や、小さな子どもやお年寄りに対する優しさ、自然の中での人間の存在、「生きる」とはどういうことなのかについて深く考えさせる教育であり、あらゆる教育活動に関連するものである。

このことを踏まえて、学校における防災教育の位置付けの重要性を認識し、教育活動の中心に据えるとともに、防災を地域の文化になるまで高めていきたい。東日本大震災を経験し、「自助」「共助」「公助」の大切さを身をもって感じた我々が、一人一人の子どもたちに、災害を乗り越え生き抜く力を与えることを、どの教育課題よりも優先すべきという認識を持って、学校運営に当たっていきたい。

地域の方々と コミュニケーションを重視して

菊地 道子（南吉成小）

震災のとき、私は荒町小学校教頭として勤務していました。荒町小は、校舎の改築工事が終了したばかりで校舎等に大きな被害はありませんでした。

ところが、保護者への児童引渡し前から、続々と避難の方が来始めました。帰宅困難者も多く、町内会ごとの人数確認もしないまま体育館に避難してもらいました。後から地域の防災担当の方が到着したときには、体育館は人であふれ、すでにマニュアルに沿って運営することは困難な状況でした。

それでも、各種会議や路上や店先で、地域の方々と顔を合わせて話をする機会が多かったこともあり、たくさんの方々の協力を得て避難所を運営することができました。地域の方々とコミュニケーションのおかげです。また、職員の団結力もすばらしく、それぞれが自分にできる仕事を見つけて取り組んでくれました。

南吉成学区は今回の震災で一部の地域で全壊・半壊もありましたが、大体は大きな被害もなく、本校校舎もほぼ大丈夫でした。しかし、今後いつどんな災害が起きるか分かりません。地域の方々と普段からコミュニケーションを取ることを心掛けるとともに、防災について共通理解を図り、南吉成中学校とも連携を図りながら、協力し訓練を行っていききたいと考えています。校内でもしっかり役割分担をするとともに、自ら進んで仕事に当たり、地域の方々とコミュニケーションを大事にする人材を育成していきたいものと考えます。

編集後記

復興元年と位置づけられた今年度も折り返し点に差し掛かりました。「特集・復興」では、復興への新たな取組として、4つの学校の実践を紹介しました。

また、「新任校長随想」には、新任の校長先生方から、復興に向けての熱い思いや決意を寄せていただきました。

大震災の教訓と学校の特色を生かした取組が、それぞれの学校で進められています。今回の記事を、復興に向けた取組の参考にいただければ幸いです。

最後になりますが、御多用の中、玉稿を賜りました校長先生方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

編集担当者：日下 孝（南光台東小）、藤本 治（加茂小）、千葉 尚（東仙台小）、丹治重廣（将監小）